

● 地図記号から知る地域の特徴とその変遷(土岐市下石地区) ●

地図とは地表空間を正確に記号化したもので、それを読み取ることで地域を正しく知ることができます。従って、地形・植生などの自然的事象はもちろん、社会的事象についてもそれを表す記号が色々と考案されていますが、現代では多様な経済活動が行われ、それを地図上で特定することは難しくなっています。例えば、工場がそこに存在するのは分かるが、何を生産しているかは分からないことが多くなっています。しかし、かつてはそれと分かるような記号があり、その地域の特徴をよく表していました。

その例として、土岐市下石町を中心とした地域の特徴を見てみましょう。よく知られているように、岐阜県東濃西部地方は南に接する愛知県瀬戸地方と同様、古くから陶磁器産業がよく発達した地域です。その原因は原料の陶土の産地であることです。地表のすぐ下に粘土層が存在し、崖や急斜面では人の力で切り崩したり、横穴を掘って比較的簡単に掘り採ることができたようです。

以上の点をふまえた上で、図1を見てください。現在は無くなりましたが水車(正式には水車房)の記号(記号1)が川沿いにあります。これは穀物の製粉用ではなく陶磁器原料の珪石・長石や陶土を粉碎し精製するためのもので、当時は身近な動力としてよく利用されていました。この水車の記号は大正9年発行の地形図までは見られます。

また、土坑の記号(記号2)にも注意してください。これは原料の陶土の採取場所を示しています。当時は登り窯を築

いて陶磁器を生産していましたが、その場所は原料採取地に近い谷などの斜面に作られたようです。さらに、その周辺地域では荒地や矮松(背の低いゆがんだ松)地の記号(記号3・4)が目立ちます。これは燃料として森林が伐採されたのが主な原因ですが、近代以前には家庭用燃料や飼料として草や木の刈取場として利用されていたためでもあるようです。

続いて図2を見てください。ここでは窯の記号(記号5)が見られます。これは磚瓦製造場とか陶磁器製造場を表わします。この窯はいままでの登窯と異なり、石炭を燃料とし、明治の末にこの地方に導入されると短期間で広がりました。その場所はいままでのように陶土の採掘地および燃料の木材伐採地の近くではなく、石炭の搬入に都合のよい道路沿い(集落の端)が選ばれています。また、原料の陶土も他の場所で採掘され、運搬されてきたようです。その結果、図1において、目立っていた土坑や荒地・矮松地はたいへん少なくなり、徐々に自然の緑がよみがえっています。

原燃料の運搬手段は同時に製品の運搬手段でもあり、この地図では一般道路のほか旧国鉄中央西線の土岐津(現土岐市)駅から駄知鉄道が敷設されているのも分かります。

また、図1で見られた水車も大正以降、陶土の精製や磁器原料の珪石の粉碎が近代工法に取って代わられたため姿を消し、図2では見られなくなります。

なお、この窯の記号と植生の様子は昭和24年発行の地形図までは見ることができます。

図1 5万分の1地形図「瀬戸村」(明治32年発行)

図2 5万分の1地形図「瀬戸」(昭和2年発行)

【陸地測量部発行144%に拡大】



平成15年2月15日、世界分布図センター入館者が100万人を超えました。

世界分布図センターが平成7年7月7日に開館して以来、多数の方々にご利用いただいた結果であり感謝申し上げます。今後も県内外からの積極的なご利用をお待ちしております。



岐阜県図書館
世界分布図センター・情報工房

〒500-8368 岐阜市宇佐4-2-1
TEL(058)275-5111 FAX(058)275-5115
URL <http://www.library.pref.gifu.jp/map/>
E-mail mapstaff@library.pref.gifu.jp